富山医科薬科大学歯科口腔外科開設後4年間における 患者の臨床統計的観察

澤本正登・沖田 進・小竹 彌・水分寿雄
杉本裕史・吉森寿美代・梶村悦朗・山本康一
古田 勲・早津良和*・戸塚盛雄**

Clinico-statistical observation of the patients in the Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Toyama Medical and Pharmaceutical University Hospital for the fourth years

Masato SAWAMOTO・Susumu OKITA・Hiroshi ODAKE
Toshio MIZUWAKE・Hirofumi SUGIMOTO・Sumiyo YOSHIMORI
Etsuroh KAJIMURA・Koichi YAMAMOTO・Isao FURUTA
Yoshikazu HAYATSU*・Morio TOZUKA**

Abstract: The authors have performed a clinico-statistical observation on new medical patients. The subjects were 4185 patients of the Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Toyama Medical and Pharmaceutical Hospital, during a four-year period.

The results are as follows:

1. Of the 4185 patients, 2231 were males and 1954 were females, for a male/female ratio of 1.14 : 1.
2. The lesions were divided into the following groups: general dental lesions 1825 cases (43.6%), inflammation 599 cases (14.3%), cystic lesions 387 cases (9.3%), impacted teeth 309 cases (7.4%), trauma 165 cases (3.9%), mucosal lesions 161 cases (3.8%), lesions of temporomandibular joint 152 cases (3.6%), tumor 102 cases (2.4%), (38 cases were malignant and 64 were benign tumors), malformations and transformations 63 cases (1.5%), nervous lesions 40 cases (1.0%), and others 382 cases (9.1%).
3. In-patients included 320 cases, which correspond to 7.6% of the new medical patients. In these cases, cystic lesions accounted for 96 cases (30.0%), inflammation for 68 (21.3%), tumors for 53 (16.6%), traumata for 51 (15.9%), and others for 52 cases (16.2%).

Key words: clinico-statistics

富山医科薬科大学医学部附属病院歯科口腔外科
(主任: 古田 勲教授)

* 山口大学医学部歯科口腔外科学講座
(主任: 篠崎文彦教授)

** 岩手医科大学歯学部歯科診療室
(主任: 戸塚盛雄教授)
Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Faculty of Medicine, Toyama Medical and
Pharmaceutical University (Chief: Prof. Isao

Furuta)

* Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Yamaguchi School of Medicine (Chief: Prof.
Fumihiko Shinozaki)

** Department of Oral Diagnosis, School of Den-
tistry, Iwate Medical University (Chief: Prof.
Morio Tozuka)

受付日: 昭和60年5月20日

I. は じ め に

富山医科薬科大学附属病院歯科口腔外科は、昭和54年10月の開設以来、昭和58年9月で4年を経過した。当科は大学附属病院の一診療科として県下で最初に口腔外科を標榜し、地域医療の一端を担ってきた。今回、われわれは当科受診患者の実態を把握するため臨床統計的観察を行ったので報告する。

II. 観 察 対 象

昭和54年10月の本学附属病院ならびに当科の開設より、昭和58年9月までの4年間に当科を受診した外来新患総数は4,673名であった。このうち同一患者が、同一疾患もしくは一般歯科疾患で3か月間診療中断後、新たに受診し外来新患者となった488名を除く4,185名を観察の対象とした。

III. 観 察 結 果

1. 年度別患者数

当科を開設した10月から翌年9月までを1年間とし、4年間について年度別に患者数の推移を観察した。外来新患数は初年度1,023名で、その後の3年間において患者数の著明な増減はなく、年間の平均外来新患数は1,046.3名であった。

外来患者延数では初年度が4,227名と最も少なく、開設3年目の6,982名が最も多かった(表1)。

表 1 年度別患者数——'79.10~'83.9——

期 間	外来新患数	外来患者延数
'79.10~'80.9	1,023	4,227
'80.10~'81.9	1,055	5,773
'81.10~'82.9	1,076	6,982
'82.10~'83.9	1,031	6,293
計	4,185	23,275

2. 性 別

外来新患4,185名の性別では、男性2,231名(53.3%)、女性1,954名(46.7%)と男性がやや多く男女比は1.14:1であった。

3. 年齢別患者数

年齢別患者分布は図1のごとく20歳代が最も多く897名(21.4%)であり、ついで30歳代831名(19.9%)、40歳代612名(14.6%)、50歳代586名(14.0%)の順であった。0~9歳、10歳代、60歳代では350名前後とほぼ同じ患者数を示し、70歳以上では192名(4.6%)と少なかった(図1)。

4. 月別患者数

4年間における1か月間の平均外来新患数および平均外来患者延数はおおの87.2名、484.9名であった。

月別の観察では、図2のごとく患者数の最も多かったのは新患数、延数ともに7月で年間平均患者数はそれぞれ104.5名、605.3名であり、また最も少なかったのは新患数においては12月の73.3名、延数では10月の402.0名であった(図2)。

図 1 年齢別患者数——'79.10~'83.9——

図2 月別患者数——'79.10~'83.9——

5. 地域別患者受診頻度

県内患者分布は富山県を9市7郡に分割し、それぞれの地区において人口1万人に対して当科を受診した外来新患者数を調査した。

患者受診頻度の高い地区は当院の所在する富山市および当院隣接地区で、受診患者数からみても当院周囲の3地区だけで外来新患者数の62.6%を占めていた。県全域においては県東部が県西部に比べ受診頻度が高く、口腔外科医療機関の所在する金沢市と近距離にある県最西部で最も受診頻度が低かった(図3)。

これら県内在住者の外来新患者総数に占める割合は98.0%で、残り2.0%の県外受診患者の内訳は新潟県からの34名を最多として、岐阜県19名、石川県7名、その他22名であった。

6. 疾患別頻度

外来新患4,185名中、保存、補綴処置ならびに矯正治療を含む一般歯科疾患は1,825例(43.6%)、口腔外科疾患は2,360例(56.4%)で口腔外科疾患が過半数を占め、その比率は1:1.3であった。

表2 疾患別頻度——'79.10~'83.9——

疾患名	例数	%
炎症	599	25.4
嚢胞	387	16.4
歯牙埋伏	309	13.1
外傷	165	7.0
粘膜疾患	161	6.8
顎関節疾患	152	6.4
腫瘍	102	4.3
神経性疾患	40	1.7
変形症	33	1.4
奇形	30	1.3
その他	382	16.2
計	2,360	100.0

両者の年齢別患者数は、0歳から40歳代までは口腔外科疾患の患者数が多く、50歳代ではほぼ同数となり、60

図 3 地域別患者受診頻度——'79.10~'83.9——

図 4 □腔外科疾患および一般歯科疾患年齢別患者数——'79.10~'83.9——

図 5 年齢別疾患頻度——'79.10~'83.9——

表 3 炎症——'79.10~'83.9——

疾患名	外来例数 (%)		入院例数 (%)	
智歯周囲炎	240	40.1	4	5.9
歯槽骨炎	128	21.4	1	1.5
上顎洞炎	53	8.8	11	16.2
蜂窩織炎	45	7.5	21	30.8
骨膜炎	43	7.2	16	23.5
骨髓炎	31	5.2	10	14.7
唾液腺炎	24	4.0	0	0
頬部膿瘍	18	3.0	4	5.9
リンパ節炎	11	1.8	1	1.5
外歯瘻	6	1.0	0	0
計	599	100.0	68	100.0

炎症は口腔外科疾患の25.4%と最も多数を占め、その内訳は智歯周囲炎、歯槽骨炎がそれぞれ240例(40.1%)、128例(21.4%)で両疾患により炎症599例の61.5%と過半数を占めていた。これについて上顎洞炎53例(8.8%)、蜂窩織炎45例(7.5%)、骨膜炎43例(7.2%)、骨髓炎31例(5.2%)などの順であった。

入院した症例は599例中68例(11.4%)で、蜂窩織炎21例(30.8%)が最も多く、そのほか骨膜炎16例(23.5%)、上顎洞炎11例(16.2%)、骨髓炎10例(14.7%)などの順であった(表3)。

炎症における年齢別患者分布では20歳代が最も多く

歳以上では一般歯科疾患患者数が口腔外科疾患患者数を上回っていた(図4)。

一般歯科疾患を除く口腔外科疾患の疾患別頻度では、炎症599例(25.4%)、嚢胞387例(16.4%)、診療上多数認められた埋伏歯牙の抜歯症例を一項目とし309例(13.1%)、ついで外傷165例(7.0%)、粘膜疾患161例(6.8%)、顎関節疾患152例(6.4%)、腫瘍102例(4.3%)の順であった(表2)。

また各年代の口腔外科疾患患者総数を100%とし各疾患の占める割合を観察すると、炎症は20歳未満ではやや少ないが20歳代および30歳代では30%以上の高値を示し、40歳以上でも20%以上の頻度で認められた。嚢胞も炎症と同じ傾向を示し、20歳代にやや低い10歳から50歳代の広い年齢層に高い割合で認められた。外傷はとくに0~9歳、10歳代で頻度が高く、腫瘍は50歳未満では5%以下の割合でしか認められなかったが、50歳代からは加齢とともに高い頻度で認められ70歳以上では15.6%と最も高い値を示した。歯牙埋伏は智歯の抜歯が多かった20歳代と、過剰埋伏歯の多く認められた0~9歳でそれぞれ25.6%、18.6%と高い値であった。粘膜疾患は加齢とともに頻度を増し70歳以上で16.7%と最も頻度が高かった。顎関節疾患は0~9歳では0.9%しか認められなかったが、他の年齢層では6~9%の割合で平均して認められた(図5)。

以下、炎症、嚢胞、外傷、腫瘍の項目について検討を加えた。

1) 炎症

図 6 炎症年齢別患者数——'79.10~'83.9——

表 4 嚢 胞——'79.10~'83.9——

疾患名		外来例数(%)		入院例数(%)		
顎骨嚢胞	歯性	歯根嚢胞	187	48.3	23	24.0
		濾胞性歯嚢胞	22	5.6	3	3.1
	非歯性	術後性上顎嚢胞	97	25.1	64	66.7
		正中口蓋嚢胞	8	2.1	2	2.1
		球状上顎嚢胞	2	0.5	0	0
		静止性骨腔洞	2	0.5	0	0
		下顎正中嚢胞	1	0.3	0	0
		外傷性骨嚢胞	1	0.3	0	0
軟組織嚢胞	粘液嚢胞	49	12.6	1	1.0	
	ガマ腫	14	3.6	1	1.0	
	側顎嚢胞	2	0.5	2	2.1	
	鼻前庭嚢胞	1	0.3	0	0	
	頬皮嚢胞	1	0.3	0	0	
		387	100.0	96	100.0	

表 5 外 傷——'79.10~'83.9——

疾患名	外来例数 (%)		入院例数 (%)	
軟組織外傷	34	17.5	6	9.1
歯牙破折	24	12.4	3	4.5
歯牙脱臼	46	23.7	5	7.7
歯槽骨骨折	22	11.3	7	10.7
下顎骨骨折	55	28.4	33	50.0
上顎骨骨折	10	5.2	9	13.6
上下顎骨骨折	3	1.5	3	4.5
計	194	100.0	66	100.0
重複症例	29		15	
患 者 数	165		51	

166例 (27.7%) について30歳代147例 (24.5%), 40歳代94例 (16.8%) とつづいており年齢が増すにつれ患者数は減少していた。0~9歳代では27例 (4.5%), 10歳代は42例 (7.0%) であった (図6)。

2) 嚢 胞

嚢胞は口腔外科疾患の16.4%にあたる387例で、顎骨嚢胞320例 (82.7%), 軟組織嚢胞67例 (17.3%) であっ

た。
最も多く認められた歯根嚢胞は外科的処置を行った症例を対象とし187例 (48.3%), ついで術後性上顎嚢胞97例 (25.1%), 粘液嚢胞49例 (12.6%), 濾胞性歯嚢胞22例 (5.6%), ガマ腫14例 (3.6%) などであった。

入院患者は387例中96例 (24.8%) で術後性上顎嚢胞が64例と最も多く、ついで歯根嚢胞23例であった (表4)。

嚢胞の年齢別患者分布では30歳代が最も多く101例 (26.1%), 40歳代81例 (20.9%), 20歳代63例 (16.3%), 10歳代56例 (14.5%), 50歳代51例 (13.2%) の順であった (図7)。

図 7 嚢胞年齢別患者数——'79.10～'83.9——

図 8 外傷年齢別患者数——'79.10～'83.9——

図 9 腫瘍年齢別患者数——'79.10～'83.9——

表 6 腫 瘍——'79.10～'83.9——

疾患名		外来例数 (%)		入院例数 (%)		
歯原性	歯 牙 腫	9	8.9	3	5.7	
	エ ナ メ ル 上 皮 腫	7	6.9	5	9.4	
	セ メ ン ト 質 腫	3	2.9	0	0	
	歯 原 性 石 灰 化 上 皮 腫	1	0.9	1	1.9	
	セ メ ン ト 質 形 成 線 維 腫	1	0.9	0	0	
非歯原性	良 性	血 管 腫	16	15.8	4	7.5
		多 形 性 腺 腫	7	6.9	6	11.3
		乳 頭 腫	7	6.9	1	1.9
		線 維 腫	6	5.9	1	1.9
		骨 腫	2	1.9	2	3.8
		リ ン パ 管 腫	1	0.9	1	1.9
		角 化 性 棘 皮 細 胞 腫	1	0.9	0	0
		神 経 鞘 腫	1	0.9	0	0
	悪 性	多 発 性 粘 膜 神 経 腫	1	0.9	0	0
		顆 粒 細 胞 性 筋 芽 細 胞 腫	1	0.9	0	0
		癌 腫	37	36.7	28	52.8
		悪 性 黒 色 腫	1	0.9	1	1.9
計		102	100.0	53	100.0	

3) 外 傷

外傷は165例で口腔外科疾患の7.0%を占めていた。疾患の分類では下顎骨骨折単独が55例（28.4%）を占め、歯牙脱臼 46 例（23.7%）、縫合処置を必要とした軟組織外傷34例（17.5%）などが高い割合で認められた。なお当科における4年間の顎骨骨折症例に関する臨床統計的観察はすでに早津ら¹⁾が報告している。

図 10 入院患者内訳

図 11 各施設の報告による入院患者の疾患別割合

外傷における入院症例は51例であり、このうち45例(88.2%)が顎骨骨折であった(表5)。

年齢別患者分布では軟組織、歯牙、歯槽骨の外傷は0～9歳、10歳代の比較的低年齢に多く、加齢にしたがい減少傾向を示した。顎骨骨折は最低年齢4歳から最高年齢76歳の範囲に認められ、10歳代が18例と最も多く、ついで20歳代と40歳代が13例、50歳代が9例で30歳代では6例と比較的患者数が少なかった(図8)。

4) 腫瘍

腫瘍は病理組織検査に基づき診断を行ったが治療法にcryosurgery, レーザーなどの使用により検査材料を直接採取できなかった症例については臨床診断に従った。

腫瘍は口腔外科疾患の4.3%を占める102例で、良性腫瘍64例(62.7%)、悪性腫瘍38例(37.3%)であった。悪性腫瘍は38例中37例は癌腫でその組織型は扁平上皮癌32例、腺癌1例、腺様嚢胞癌1例、粘表皮癌1例、悪性多形性腺腫1例、verrucous carcinoma 1例であった。肉腫は認められず上顎歯肉原発の悪性黒色腫が1例であ

図 12 他科入院患者および職員の割合

った。良性腫瘍では歯原性腫瘍が21例で、そのうち歯牙腫が9例と最も多く、ついでエナメル上皮腫7例であった。その他セメント質腫3例、歯原性石灰化上皮腫、セメント質形成線維腫各1例が認められた。非歯原性腫瘍は43例で、血管腫が16例と最も多く、ついで乳頭腫、多形性腺腫が各7例、線維腫6例の順でその他神経鞘腫などが認められた(表6)。

年齢別患者分布では50歳代が24例(23.5%)で最も多かった。ついで60歳代18例(17.6%)、40歳代13例(12.7%)の順であった。悪性腫瘍では最低年齢31歳から最高年齢85歳の年齢層に発現し、最も多かったのは60歳代の13例であった(図9)。

7. 入院患者

入院患者は320例で外来新患の7.6%、口腔外科疾患の13.6%にあたり、その内訳は嚢胞96例(30.0%)、炎症68例(21.3%)、腫瘍53例(16.6%)、外傷51例(15.9%)の順であった(図10)。

また各疾患における入院患者の割合を観察すると腫瘍が51.9%と最も高く、ついで外傷30.9%、嚢胞24.8%、炎症11.4%であった。

一方、当科における入院患者傾向を既報告例と比較すると、当科においては奇形の患者が0.9%と少なく嚢胞の患者が30.0%と他の医療機関に比べ高い値であったのが特徴的であった(図11)。

8. 院内患者

総合病院もしくは医学部附属病院における歯科口腔外科では、院内患者すなわち他科入院患者および職員、学生らの受診が多く外来新患において高い割合を占めることが考えられる。今回、当科の統計においても外来新患総数4,185名の23.2%にあたる970名が院内患者であっ

た。また院内患者の98.0%が一般歯科処置の対象であり、これは当科を受診した一般歯科患者の過半数(53.1%)を占めていた(図12)。

IV. 考察

富山医科薬科大学は、国立大学で最初に医学部のみならず薬学部および漢薬研究所をあわせ持つきわめてユニークな大学として昭和51年4月に開学し、その後、附属病院は昭和54年10月に開院された。その際当科も附属病院の一診療科として県下で最初に口腔外科を標榜し、昭和58年9月で4年を経過した。今回われわれは、この間の当科受診患者の実態を把握することを目的に臨床統計的観察を行った。

まず外来新患4,185名の年齢別分布では20歳代にピークがあり、加齢とともに減少傾向がみられた。10歳代および10歳未満の患者数は60歳代とほぼ同数であった。これは小川ら¹⁷⁾の報告と同じ傾向を示したが、田中ら¹⁸⁾の10歳未満の患者が多かったとする報告と相違した。その理由として主に乳幼児による奇形が11.2%と高い割合を占める田中らの報告に比し当科では奇形症例が1.3%であったことによると考えられる。

月別患者数の観察では外来新患数、延数ともに春期から夏期にかけ増加し、秋期から冬期にかけて減少する傾向を示した。これは特に本県においては4月、5月および9月から11月が農繁期であり、また冬期間は当地域の降雪が多く患者数が減少し、一方、6月から8月は農閑期となり、また学校休暇期間とも重なり患者数が増加する傾向にあるためと思われる。

これら受診患者の地区別分布は当院が所在し、また当県で約31万人と最も人口の多い富山市からの来院が多く、42.0%を占めていた。しかし、人口1万人に対する当科外来新患者を観察すると、当院に隣接する郡部からの受診頻度が比較的高かった。これは当院が距離的に富山市街地よりむしろ隣接する郡部に近く、また富山市からの患者は他の医療機関より紹介され、当院が二次あるいは三次病院としての役割を果たしていると考えられるのに比べ近距離在住者は一次病院とし、当科を受診する傾向が強いためと思われる。

大学医学部附属病院における口腔外科臨床は、清水¹⁹⁾が述べているごとく歯科、口腔外科として併存し診療する場合が少なくなく口腔外科の専門診療科として外来診療を実施しても一般歯科疾患の占める割合は高く、このことが医学部ないし医科系附属病院の特徴の一つと思われる。当科においても一般歯科疾患患者数は外来新患4,185名中、1,825名(43.6%)と高い割合で認められた。この値は奈良県立医科大学口腔外科²⁰⁾の35.6%より高く、福岡大学医学部歯科口腔外科²¹⁾の46.5%、大分医科大学歯科口腔外科¹⁹⁾の55.7%、徳島大学医学部歯科口

腔外科²²⁾の74.1%より低かった。当科において一般歯科疾患患者が多い原因として入院患者および職員などの院内患者が一般歯科処置を希望し受診する症例が多いことがあげられる。とりわけ院内患者は一般歯科疾患の53.1%を占め、その他職員の家族、学生など当大学に関係する患者が多かった。

口腔外科疾患を疾患別にみると、炎症は20歳未満、70歳以上を除く各年齢層で20%以上の高い頻度で認められた。とくに20歳代、30歳代ではそれぞれ32.9%、32.1%と高い割合であった。その一因として、この年代に炎症の40.1%を占める智歯周囲炎の症例が集中していることがあげられる。炎症599例のうち入院を要した患者は68名、11.4%であり、その割合は腫瘍、外傷、嚢胞に比べ低かった。これは近年における抗生物質の発達や医療機関の充実により重篤な炎症症例が減少しつつあることによると考えられる。また炎症による入院患者の年齢別分布では、30歳代16例、20歳代10例と外来患者数に比べ入院患者数が少なく、高齢者に入院を要する割合が高かった。

嚢胞疾患は387例で、歯根嚢胞が187例(48.3%)と非常に多く約半数を占めていた。ここで分類した歯根嚢胞は外科的処置を施行した症例で、歯内療法により治療を行った症例は一般歯科疾患として取り扱った。歯根嚢胞について多かったものは術後性上顎嚢胞の97例で25.1%を占めていた。入院症例に関しては術後性上顎嚢胞64例、歯根嚢胞23例でこの両疾患をあわせると実に当科における嚢胞疾患入院症例の90.7%を占めていた。年齢別分布では30歳代にピークのあるピラミッド型を示し、10歳未満、60歳以上では比較的少なかった。顎骨嚢胞と軟組織嚢胞の比較では、20歳未満の若年者に軟組織嚢胞の占める割合が高い傾向にあった。

外傷の特徴は、すでに当教室の早津ら¹⁾が報告しているごとく顎骨骨折において40歳以上の患者の占める割合が41.2%と高率に認められた点であり、この原因として富山県での青年層の大都市への流出に伴う中高年齢層の相対的な増加との関連が指摘されている。また軟組織、歯牙、歯槽骨などの比較的軽症な外傷症例と顎骨骨折症例を対比してみると、その比率は1.85:1と前者の割合が高く、とくに20歳未満では3.7:1となり若年層では軽症例の占める割合が高いことが認められた。このことは外傷患者の60.0%を占めていた20歳未満の患者のうち入院を必要とした症例数は21例であり、外傷入院患者51名の41.1%にすぎないことからもうかがわれた。これは通学、通勤に利用される自転車等による比較的軽度な事故の多い本県の特徴の一つとも考えられる。

当科外来における腫瘍症例は良性腫瘍64例、悪性腫瘍38例であった。外来診療における腫瘍症例の報告として小川ら¹⁷⁾は1年6か月間に良性腫瘍29例、悪性腫瘍24例、清水¹⁹⁾は1年2か月間に良性腫瘍29例、悪性腫瘍18

例、田中ら¹⁵⁾は1年間に良性腫瘍30例、悪性腫瘍14例とその比率がほぼ2:1と報告しているが当科においても同様の割合で観察された。また良性腫瘍を歯原性・非歯原性に分けてその頻度を比較すると、清水¹⁹⁾は歯原性腫瘍2例、非歯原性腫瘍27例、田中ら¹⁵⁾は歯原性腫瘍2例、非歯原性腫瘍28例でその比率は約1:14であった。これに対し当科では歯原性腫瘍21例、非歯原性腫瘍43例と両者の比率は1:2となり、歯原性腫瘍が前報告例に比しきわめて多い傾向がみられた。

V. ま と め

昭和54年10月より昭和58年9月までの4年間に富山医科薬科大学附属病院歯科口腔外科を受診した外来新患4,185名について臨床統計的観察を行い、次の結果を得た。

1. 4,185名中、男性は2,231名、女性は1,954名で男女比は1.14:1であった。
2. 年齢別患者分布は20歳代が最も多く、加齢とともに患者数は減少し、20歳未満および70歳以上の占める割合が少なかった。
3. 月別患者数は6月から8月に多く、10月から2月の秋期から冬期に少なかった。
4. 当科受診患者のほとんどが県内在住者で、外来新患総数の98.0%を占めていた。
5. 疾患別では一般歯科疾患1,825例、炎症599例、嚢胞387例、歯牙埋伏309例、外傷165例、粘膜疾患161例、顎関節疾患152例、腫瘍102例、その他485例であった。
6. 入院患者は外来新患数の7.6%にあたる320例で、嚢胞96例、炎症68例、腫瘍53例、外傷51例、その他52例であった。
7. 他科入院患者および職員の受診患者数は外来新患数の23.2%を占め、そのうち98.0%が一般歯科処置の対象患者であった。

引 用 文 献

- 1) 早津良和、澤本正登、他：富山医科薬科大学歯科口腔外科における顎骨骨折症例の臨床統計的観察。日口外誌 30: 872-878 1984。
- 2) 宇野史子、宇野一雄、他：最近3年間における入院患者の類別的観察(抄)。日口外誌 28: 1383 1982。
- 3) 池田憲昭、蜂矢裕司、他：名古屋第一赤十字病院歯科口腔外科における過去4年8か月の入院患者についての総括(抄)。日口外誌 26: 541 1980。
- 4) 富田喜内、河村正昭、他：北海道大学歯学部附属病院における8年間の入院患者の臨床統計的観察(抄)。日口外誌 21: 913 1975。

- 5) 般山忠夫, 児玉俊治, 他: 佐久総合病院歯科口腔外科における開設後6年間の入院患者222症例の臨床統計的観察(抄). 日口外誌 19: 659 1973.
- 6) 佐々木弘人, 太田 寛, 他: 長崎大学医学部歯科口腔外科(顎顔面)第2診療科3年6ヵ月間における入院患者の臨床統計的観察(抄). 口科誌 30: 354 1981.
- 7) 山田祐敬, 杉浦正幸, 他: 地方都市病院(市立岡崎病院)における歯科口腔外科診療について(抄). 日口外誌 26: 541 1980.
- 8) 山口修平, 金沢喜美, 他: 福岡大学病院歯科口腔外科開設後約3年間における入院患者の臨床統計的観察(抄). 日口外誌 23: 609 1977.
- 9) 藤野雅美, 中村保夫, 他: 慶応義塾大学医学部附属病院歯科口腔外科における最近10年間の入院患者の臨床統計的観察(抄). 口科誌 27: 566 1978.
- 10) 右田信行, 永井晴彦: 山口県立中央病院歯科口腔外科における過去1年間の入院患者について(抄). 日口外誌 20: 193 1974.
- 11) 下郷和雄, 吉川義則, 他: 市立四日市病院における歯科口腔外科診療について(抄). 日口外誌 28: 975 1982.
- 12) 小松義明, 西村 修, 他: 当科における最近7年間の入院患者の統計的観察(抄). 日口外誌 28: 1355 1982.
- 13) 乾 晃: 国立金沢病院歯科口腔外科における入院患者の11年間の統計的推移(抄). 日口外誌 21: 141 1975.
- 14) 田島時博, 佐藤一郎, 他: 三重県立大学医学部附属病院口腔外科入院患者の動態(抄). 日口外誌 19: 659 1973.
- 15) 田辺富一, 大森正男: 福井県立病院歯科口腔外科における過去5年間の入院患者動態(抄). 日口外誌 28: 975 1982.
- 16) 牧角昭二, 赤尾光雄, 他: 鹿児島市立病院歯科口腔外科における過去5年間の入院患者の臨床統計的観察(抄). 日口外誌 29: 748 1983.
- 17) 小川邦明, 藤岡幸雄, 他: 岩手医科大学歯学部口腔外科における外来診療の実態について. 日口外誌 17: 386-391 1971.
- 18) 田中 勉, 太田一男, 他: 鹿児島大学歯学部第2口腔外科学講座開設後1年間の患者の臨床統計. 日口外誌 29: 726-731 1983.
- 19) 清水正嗣: 口腔外科外来診療の特殊性. 歯科ジャーナル 18: 553-563 1983.
- 20) 當麻恭司, 河野孝行, 他: 奈良県立医科大学口腔外科開設後1年間における外来患者の臨床統計的観察(抄). 日口外誌 29: 1191 1983.
- 21) 山口修平, 阿部孝二, 他: 福岡大学病院歯科口腔外科開設後5年間の外来患者の臨床統計(抄). 日口外誌 26: 512 1980.
- 22) 吉田幸子, 川田雄祥, 他: 徳大歯科臨床における6ヵ年間の疾患別統計観察 第2報. 日口外誌 6: 213-216 1960.